

古川 知明（埋蔵文化財センター所長）

1 はじめに

近世期富山城下町における石造物製作は、いわゆる町石工が行った。富山町のどこにどのような石工が存在し、どのような石造物を製作していたのかは、資料がなく不明な点が多い。

本稿では、近世富山町における石工の製作状況についての概要を把握することを目的とする。

2 研究史

京田良志氏ほかによる富山市内石仏調査では、富山市街地南東部の辰巳町で、文政 10(1827)年「石工 喜兵衛」の丸彫地藏 1 体が確認された〔富山市教委 1983〕。

このほか史資料に富山町石工に関する記録は見当たらない。

3 富山町石工の個別資料（表 1）

近世期において石造物に石工名が見える富山町石工は 7 人がいる。複数石造物に銘が確認できるのは 1 人のみで、その他 6 人は 1 基のみである。

(1) 見上兵右衛門

文政 3 年富山市中野新町白山社境内の狛犬一対を製作した（写真 1～4）。安山岩製。蹲踞の姿勢で、やや猫背となる。顔の特徴は、太い眉・目玉に瞳を描く・横耳・大きな団子鼻・顎両脇に渦巻の瘤形髭・二重に縁取った口等がある。顔は正面からわずかに外を向く。尾は団扇形で中央の太い尾が独立して立つ。台座は、隅角を丸く加工し、正面の 1 面のみ楕円形に縁取りし、波濤文を浮彫する。

基礎は長方体の切石 2 石を横置きし、正面に「奉納」と楷書で陰刻する。その他の 3 面には町名・寄進者名・年号・「石工／富山住／見上兵右エ門」の陰刻がある。基壇は欠失している。兵右エ門の工房所在地は不明である。

(2) 喜兵衛

文政 10 年富山市辰巳町の丸彫地藏を製作した〔富山市教委 1983〕。現地調査の結果、台座は新調され失われていたため銘は確認できなかった。本体は蓮弁一体となっており、蓮弁には弁脈が表現される。間弁は幅広縁帯である。喜兵衛の工房所在地は不明である。

(3) 林田喜助

天保 10 (1839) 年から明治 5 (18) 年までの間に 4 基を製作した。その内訳は石仏 1 基、石塔 2 基、石碑 1 基である。

天保 10 年富山市利波の自然石石仏（写真 5～6）は、安山岩の自然石を舟形に粗いノミ加工で整

表1 富山町石工在銘石造物一覧

番号	在銘年号	種別	形態	所在地	石工名	工房情報	石材	備考
1	文政3(1820)	狛犬		富山市中野新町	見上兵右衛門		安山岩	白山社境内
2	文政10(1827)	石仏	丸彫	富山市辰巳町	喜兵衛		安山岩	延命地藏と呼ばれる。台座欠
3	天保10(1839)	石仏	自然石型	富山市利波	喜助（林田喜助）	太田口	安山岩	道標、法名刻銘
4	天保13(1842)	自然石碑	顕彰碑	富山市五福	森田喜祐		安山岩	足立塚。移転。台座に石工銘
5	弘化3 (1846)	石塔	徳本名号塔	射水市白石	林田喜助	富山	花崗岩	阿弥陀寺入口
6	元治元(1864)	墓碑	櫛形墓碑	富山市五番町	三上与三郎		安山岩	光厳寺・佐久間家墓地
7	慶応3(1867)	燈籠	四角型	富山市中野新町	儀兵衛		安山岩	白山社境内
8	慶応4(1868)	自然石碑	名号塔	富山市婦中町萩島	喜助（林田喜助）	富山	神通峡砂岩	
9	不明	石碑台座	不明	富山市五福	小沢平吉	富山住人	角閃石安山岩	足立塚横。「報恩塔」正面刻銘。旧地不明
10	明治5(1872)	石碑	自然石型	射水市新湊本町	喜助（林田喜助）	富山	安山岩	専念寺境内

形し、正面を舟形に彫り窪めた奥に2体の立像を浮彫りする。右の1体は螺髪で、与願印・施無畏印を結ぶ釈迦如来である。左は合掌姿の菩薩像で、聖観音菩薩とみられる。釈迦の口がやや開き気味であることが特徴である。像間上部には法名の刻銘がある。正面上部には右に「右 中沖道」、同左に「左 大塚道」と刻銘があり、道標であったことがわかる。左側面に年号、「太田口／富山石工／喜助」と陰刻される。「太田口」は工房の所在地とみられ、城下町中央部の飛騨街道の起点（現在の富山市太田口通り）にある。

弘化3（1846）年射水市白石阿弥陀寺入口の名号塔（写真7～9）は、花崗岩製の方柱形の六字名号塔である。高さ6尺6寸（2.0m）、幅厚ともに10寸（30.3cm）である。「南無阿弥陀仏」は特徴的な文字で、名号の左下に「徳本⊕」とあり、いわゆる「徳本名号塔」に分類される。左側面に年号、右側面に「富山石工 林田喜助」と陰刻がある。

慶応4（1868）年富山市婦中町萩島の自然石の名号塔（写真10）は、神通峡産砂岩（古川2011B）の玉石を半裁し、半裁面に六字名号を陰刻したものである（注1）。この玉石は神通川河川敷で獲得可能な石材で、富山町や萩島集落は神通川河川敷に接しているので、容易に獲得できる石材である。

明治5年射水市新湊本町専念寺境内の自然石の石碑（写真11～12）は、安山岩玉石の表面に専念寺に関係した内容の文字を多数刻銘している。本体裏面に「富山石工喜助」と1行での刻銘がある。

(4) 森田喜祐

天保13年富山市五福の「足立塚」石碑を製作した（写真13～14）。この石碑は、四心多久間見日流柔術を富山に伝えた足立平陸正保を顕彰し造立したもので、現在地（五福公園）に移転する前は、西に50mほど離れた丘陵裾に存在した。石碑本体は花崗岩自然石を用いており、河川玉石である。台座は安山岩玉石で、台座裏面に「石工 森田喜祐」と陰刻がある。喜祐の工房所在地は不明である。

(5) 三上与三郎

元治元（1864）年富山市五番町光厳寺墓地内に所在する佐久間家墓地の墓石を製作した（写真15～16）。光厳寺墓地には富山藩諸家臣の墓があり、元治元年における佐久間氏は、「富城武鑑」（高瀬編1987）によればアラ町（荒町）の佐久間東庵がおり、「丸ノ内違タカノ羽」の家紋であることが記載されている。おそらく小児医である（注2）。墓石は楕形で、正面を同じ楕形に彫り下げ、「佐久間氏墓」と隷書体で陰刻する。正面上端には家紋の「丸に違い鷹の羽」が浮彫される。したがってこの墓石は東庵もしくは東庵に近い血縁者のものであろう。裏面下部に隷書体で「石工／三上与三郎」と陰刻されている。与三郎の工房所在地は不明である。安山岩製。

(6) 儀兵衛

慶応3（1867）年富山市中野新町白山社境内の燈籠一對を製作した（写真17～18）。笠・火袋・中台・基礎など主要な構成部分が四角形であることから、「四角型」燈籠に分類される。また竿は断面四角形で、下開きとなる撥形竿の型式をもつ、いわゆる「神前形」燈籠に分類される（京田1970）。竿に年号と「石工 儀兵衛」の刻銘がある。

(7) 小沢平吉

富山市五福の足立塚横に置かれた解体部材の一つに、石碑台座とみられる切石がある（写真19～20）。正面には楷書体で「報恩塔」の陰刻があり、上に乗っていた石碑は自然石であったと推定される。角閃石安山岩製。左側面に「富山住人／石工／小沢平吉」と陰刻がある。この石碑台座の旧地は不明である。

4 分布状況（図1）

富山町石工在銘品の分布は、富山町を中心に、半径1里（4km）以内に6基（60%）、半径2里以内には9基（90%）であり、ほぼ半径2里以内に流通したことがわかる。最も遠方は、射水の放生津であり、富山町から15.5km（4里弱）離れている。

石工別に見ると、半径1里以内に分布するのは、すべて林田喜助以外の石工で、これより遠方のものはすべて林田喜助製作品である。これを加味すれば、林田喜助以外の富山町石工は、半径1里以内に流通し、林田喜助はその流通範囲の外において流通したという状況と理解できる。

また、富山町地内において富山町石工製品は、城下町南東部の寺町エリアに集中しており、種類もバラエティに富む。

5 石材について (図2)

富山町石工が扱う石材は、花崗岩・安山岩・砂岩の3種類があり、安山岩が多い。花崗岩は早月川・常願寺川・神通川の河川転石が利用されているが、特定までは困難である。安山岩のうち角閃石安山岩は常願寺川産、その他の安山岩は常願寺川・神通川産があるが、大きさ等からみて、常願寺川河川転石が使用されたとみられる。砂岩は神通川上流部の神通峡産である。神通峡産砂岩は、飛騨市神岡町横山から富山市今生津にかけて飛騨街道近隣地の山地から入手が可能で、飛騨街道を通して富山町に運搬されたと推定できる。

石工別に見ると、林田喜助は種類により花崗岩・安山岩・砂岩を使い分けており、それ以外の石工は、安山岩を使用した。

6 富山町石工の特徴

富山町石工の製品は、潜在的には多数存在することが予想されるが、石工名を刻銘するものは極少ない。同じ傾向は、富山町に接して流れる神通川上流の神通川石工についても認められる (古川 2011B)。

富山町石工の製作品は、石仏・狛犬・燈籠・石碑・墓石と多岐にわたる。鳥居・社標については未見である。石材については富山町で調達可能な石材を主体としている。安山岩は、角閃石安山岩を主体としている常願寺川石工と同じ産地 (常願寺川河川敷) で獲得していると見込まれるため、常願寺川石工とどう調整したかの解明が課題である。なお、富山町石工で常願寺川産角閃石安山岩を使用する石工は1名だけである。

7 富山町石工の系譜

現状で確認できる最古の富山町石工銘は、文政3年見上兵右衛門である。兵右衛門の製作した狛犬の容姿・意匠は、近畿地方に分布する「京型・難波型」と呼ばれる狛犬型式と共通している (ねず 1994)。したがって兵右衛門の製作技術の系譜は、直接近畿地方に求めることができ、兵右衛門は、近畿地方のいずれかにおいて石工修業をした後、富山に移住して石工を続けたことが考えられる。

近畿地方との関係を示すものに、富山市於保多町於保多神社の嘉永元 (1848) 年石鳥居がある。銘は「石工 大坂 いよや亥兵衛」とある。亥兵衛は大坂の石工であるが屋号は伊予屋なので伊予国 (愛媛) 出身者であろう。花崗岩製であるが富山産ではないので、大坂で製作し船で富山へ運んだと思われる。

また、この狛犬の台座には波濤文が浮彫されている。この波濤文は、祥雲文とともにこの時期の

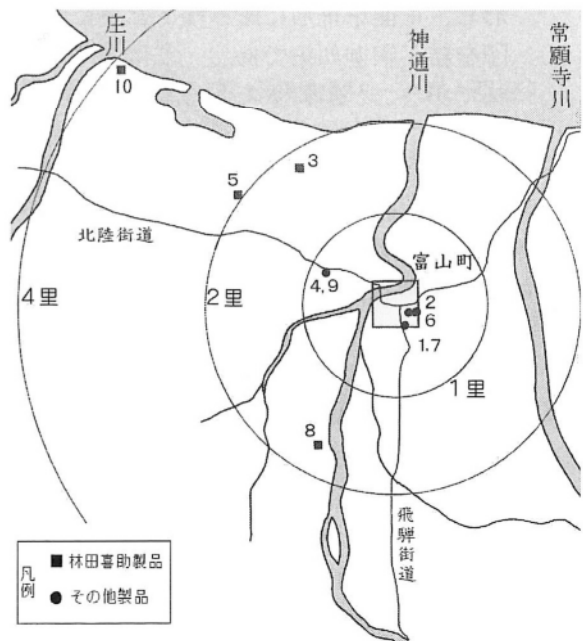


図1 富山町石工在銘品の分布状況

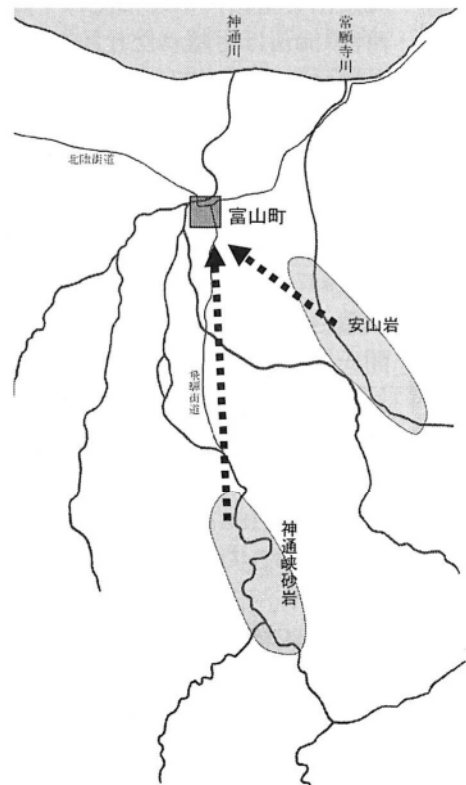


図2 富山町石工使用石材原産地と運搬ルート



写真1 文政3年西中野白山社狛犬（阿形）

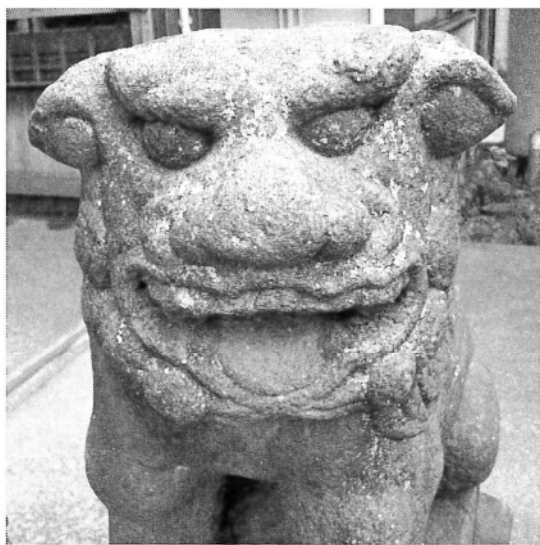


写真2 文政3年西中野白山社狛犬（阿形）



写真4 文政3年西中野白山社狛犬 基礎刻銘

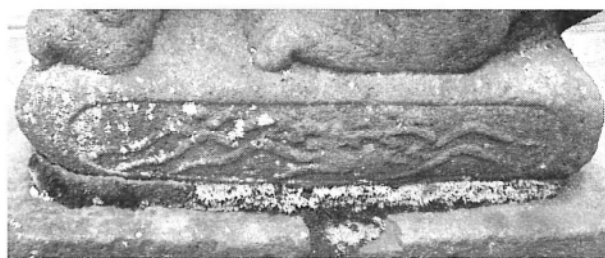


写真3 文政3年西中野白山社狛犬 台座



写真5 天保10年利波石仏



写真6 天保10年利波石仏 側面刻銘



写真 7 弘化 2 年射水市阿弥陀寺
徳本名号塔



写真 8 弘化 2 年射水市阿弥陀寺
徳本名号塔

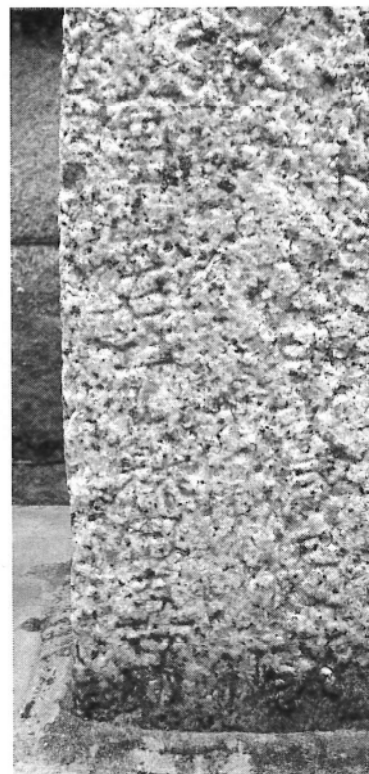


写真 9 弘化 2 年射水市阿弥陀寺徳本
名号塔 石工銘



写真 10 慶応 4 年萩島名号塔



写真 11 明治 5 年新湊専念寺石碑



写真 12 明治 5 年新湊専念
寺石碑 刻銘



写真 13 天保 13 年足立塚



写真 14 天保 13 年足立塚基礎裏面 石工銘



写真 17 慶応 3 年西中野白山社燈籠



写真 15 元治元年富山市光厳寺
佐久間家墓地墓石



写真 16 元治元年富山市光厳寺
佐久間家墓地墓石 石工銘



写真 19 年不明報恩塔基礎



写真 18 慶応 3 年西中野白山社
燈籠 石工銘



写真 20 年不明報恩塔基礎 石工銘

常願寺川石工が石仏石塔製作で多用する文様の一つであるが（古川 2011A）、狛犬台座に波濤文を施した常願寺川石工製作狛犬例はなく、明治期に至り、富山町石工の製作と推定される神通峡産砂岩製の狛犬において、台座でなく基礎に波濤文浮彫を施す例が若干認められる（注 3）。台座に波濤文の浮彫を彫る見上兵右衛門の様式は、その後継承されることはなかったが、常願寺川石工とのつながりを連想させる要素であることを指摘し、今後の課題としておきたい。

8 おわりに

富山石工が石工銘を入れる石造物は少なく、その実態はまだ十分明確にすることができないが、数少ない例を観察することにより、その系譜を探る糸口が見出すことができた。富山町石工は、これ以後の明治に入ってから力量を発揮し、神通峡産砂岩を使用した狛犬を多数製作するようになる。今後は、明治以後の富山町石工の実態の解明を通じ、近世末における富山町石工の動態を再検証する必要があると感じる。

注

- (1) 京田良志氏はこれを「礪石」と呼称している（富山市教育委員会 1983）。
- (2) 『富山藩士由緒書』（新田編 1983）によれば、文化～天保年間に佐久間家は 2 家があり、うち小児医である硯庵が名に「庵」と付けている。もう 1 家は料理人である。
- (3) 富山市寺島神明社の神通峡産砂岩製狛犬、富山市中沖二上神社の神通峡産砂岩製逆さ狛犬は、台座ではなく基礎文様に波濤文を用いる。

引用・参考文献

- 尾田武雄 1995 「芹谷山千光寺周辺の石造物中間調査報告」『土蔵』第 8 号 砺波郷土資料館蔵友の会
- 京田良志 1970 『石燈籠新入門』誠文堂新光社
- 高瀬保編 1987 『富山藩侍帳 越中資料集成 1』桂書房
- 富山市教育委員会 1983 『富山市石仏・石塔等分布』
- 新田二郎編 1988 『富山藩士由緒書越中資料集成 1』桂書房
- ねずてつや 1994 『狛犬学事始』ナカニシヤ出版
- 古川知明 2011A 「常願寺川石工中川甚衛門について」『富山史壇』第 164 号 越中史壇会
- 古川知明 2011B 「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』第 30 号 富山考古学会

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

富山市の遺跡物語 第 13 号

平成24（2012）年 3 月 30 日発行

編集・発行

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町 1-2-24

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

URL: <http://homepage2nifty.com/kitadai/>

（北代縄文広場と兼用）

E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 株式会社スカラファクトリー